

1957年モスクワ平和友好祭

—ある日本人参加者の思い出（下）—

半 谷 史 郎

前号にひきつづいて、長崎真人さんからうかがった1957年モスクワ平和友好祭に関する貴重な体験談を紹介する。本号では、参加したモスクワでの行事の様子、労働者の理想の国で感じた違和感、たまたま自宅に招かれて知った庶民の生活の貧しさといった話題をお伝える。

前号と同じく、ご著書の自分史、『命ある限り』（光陽出版社、2007年）の関連箇所は文中に〔p.**〕と記し、また最低限の補足を注記した。

Q：滞在中に色々な行事をやっていますが、どうやって行く所を決められたのですか。

A：一応プログラムは来ます。

Q：日本語に訳したのですか。

A：はい。特に日本の団体の土方などが使っている、一番中心部の指導部から当日のプログラムが来て、この範囲で行きたい所を選べというかたちでした。

Q：それは手書きのものが来たのですか。印刷されていましたか。印刷だとすると、どうやって印刷したのかなと今ふと思ったのですけれども。

A：印刷ではないでしょうね。手書きだと思います。

Q：メモでしょうね。

A：はい。それほど大勢に回せるようなものではありません。

Q：土方さんと親しかったから、割と情報が行っていたということでしょうか。人によっては、どこで何をやっているのか分からなかったそうですが……。

A：私の場合は、毎日自分で選んで、そのプログラムの中からどこへ行こう

と、自分で選んで行きました。

Q：1人で行動されていたのですか。

A：一緒のこともあったけれども、ほとんど1人でした。

Q：移動はどうされていきましたか。

A：行く先によってソ連側の案内がありました。例えば、ポリショイ劇場に行く時とか。

Q：チケットが全員に回ったそうですね。

A：ポリショイへ行きたいと選択すれば、そこの送迎バスがあって、案内してくれました。私は主として諸外国の代表団との懇親会を選んで行ったので、これもバスが行き帰りにありました。

Q：そこへ向けてのバスがあるのですか。

A：はい。

Q：どれぐらいのバスですか。マイクロバスのようなものですか。

A：普通のバスです。

Q：50人とか100人ぐらいその気になれば乗るようなものですか。

A：40～50人のものです。

Q：それで行って、それで帰ってくるのですか。

A：はい。これは面白い記憶なのですが、帰りのバスに乗り遅れてしまったことがあります。ホテルまでどうやって帰ればよいかということで、僕はロシア語を全然勉強せずに行ったので、目に立ったロシア人に聞きました。そして、モスクワの市民が一般に乗るバスに乗ってしまいました。

Q：帰ってこれたのですか。

A：オスタンキノ行きバスに1人で乗って帰ってきました。

Q：ともかくバスなのですね。

A：そうですね。これが面白い、偶然すぎる話なのですが、そのバスに私が1人で乗ってオスタンキノまで行くとき、専用ではないので、立ってつかまって乗っているわけです。そうすると、ロシア人の青年が話し掛けてきて、英語で話し掛けてきました。私は英語もろくにできないのだけれども、日本人ですか、そうですと。実は私の両親は、戦後、満州に行っていて。

Q：この FUMIKO の話ですね [p. 243-245]。

A：母親が大変お世話になった FUMIKO という女性とも連絡が取れればということ、その FUMIKO の住所と氏名を書いたものをポケットから出して、私に渡しました。偶然にしては手配が出来すぎているので、少し疑いました。何か裏があるのかもしれないと疑いましたが、きちんと住所と氏名が合っていて、日本へ帰ってからその住所宛てに手紙を出したら行き先不明で戻ってきたものの、その後、赤旗と朝日新聞の求人広告に載せたら、20～30通の返事が来ました、その読者から。それが全てその FUMIKO さんのお友達でした。身元も最終的に分かりました。本人から手紙が来るところまで行ったので、真実の話だったという結果になりました。そのような話がバスの中で、私が1人でたまたま乗ったバスの中であったのは少し不思議な気がします。

Q：日本人だと分かる何かを付けていましたか。

A：バッチは付けていました。

Q：それを目当てに、多分……。

A：向こうがそのようなチャンスを狙っていたのかもしれない。

Q：外国人に会うのはめったにない機会なので。

A：一種の規制があったかもしれませんね。向こうにとっても、外国代表団と言えども、そのまま信用するわけにはいきません。

Q：しかし、探そうと思っている人からすると、日本人の宿舎がどこかというところまでは分かります。だから、どこ行きのバスに乗っていれば会う可能性が高いとまでは考えると思います。

A：そのようなことでしょうね。たまたま私1人でオスタンキノまで帰ることになって、どここのバスに乗ればよいかと尋ねながら動いていてそのような話にぶつかったわけです。

Q：今、語学力の話が出ましたが、理乙なのでドイツ語ですね。

A：1年きりですけどもね、兵隊に取られましたから。それでも、一応ドイツ語を原書で読めるところまでは来ていましたね。

Q：あとは、英語が今の話だと少しと。

A：これも、当時の語学の勉強ですから、会話は一切ありません。

Q：読むことですね。

A：だから、会話というものは、英語の会話らしきものをやったのはこれが初めてです。ロシア語は、ロシア語の会話の本を至急買いました。

Q：行くと決まったときですか。

A：行きの車両の中で。

Q：勉強されましたか。

A：あまり勉強のあれはなかったですけども……。おしゃべり程度。だから、ほとんどダスビダーニャとか、ズドラストブイチェとかいうくらいの、ごく短い、呼び掛けの「ダバイダバイ」というような、会話の初歩の初歩の話です。

Q：しかし、外国の方との交歓会に出られるということは言葉が必要ですが、それはどうされていたのですか。

A：例えば、イギリスとの交歓会なら、日本側に通訳をやる人がいました。

Q：通訳と一緒に行くわけですね。

A：通訳付きでやりました。ベトナム、インドネシア、中国などというようなところが記憶に残っていますが、特にインドネシアとの場合などでは通訳はありませんでした。恐らく、日本とインドネシアでは通訳はそれほどいないのでしょう。

Q：仕方がないですね。

A：だから、みんな手まね足まねでした。これは本当に困ってしまいましたが、インドネシアの青年の連中が、日本の占領時代に日本の軍歌や国民歌謡といった歌をきちんと身に付けているのです。

Q：やはりエリートですから。

A：それを歌うのです、懐かしがって。

Q：書かれていますね [p. 236-238]、「見よ、東海の空明けて」。

A：それを一緒になって歌わなければいけないのは変な話です。でも、向こうは本当に親愛の情をこめて歌うわけです。日本という国は一体なんだろうかと思えます。

Q：今の話は人の話を聞く方ですが、長崎さんが日本のことを紹介することは

なかったのですか、外国の人に。

A：交歓会などの席で代表がお互いにくさり挨拶をしますが、私の場合は一団員ですから、そのような挨拶は一切なしで、いきなり団員同士の交歓です。筆談も通じません。あとは手まねですね。まずやることは、指を折ってアイン・ツバイ・ドライとか。耳だとか口だとかを指して、お互いの言葉を言い合うようなことから始めて、あとはバッジの交換ですね。それから、全体ではお互いの歌の紹介になります。

Q：そのようなときに日本側で歌う歌はなんですか。

A：何を歌ったのでしょうか。

Q：記憶にありませんか。

A：記憶にありません。相手次第なので、インドネシアの場合なら、「見よ、東海の」。

Q：歌わなければ仕方がないのですね。

A：それから、ロシアの場合には、ロシア民謡があります。

Q：うたごえなどで覚えたものですね。

A：これが通じました。あれは結構通じますね。

あとは、中国も割と。私は中国の国歌ぐらいは歌えたので、ある程度通じたでしょうね。

Q：今のお話だと、外国の方との交流は、片言の言葉なり、歌なり、そこまでですね。

A：そうです。

Q：それ以上は、平和のためになんとか、そうした難しい話はできませんね。

A：できませんね。あとは写真の交換くらいです。

Q：それはそれで楽しい、今までにない経験でしょうが。

A：それは実に楽しいです。ともかく、言葉は通じなくても、お互いの親愛の情が、仲間同士という感覚が基礎にあります。恐らく私の場合で言えば、国柄の違いはあっても、同じ青年運動をやっている仲間としての同志的な感覚が基本的にあるので、なんの違和感もありませんでした。言葉が通じなくても、気持ちは通じるわけです。

Q：滞在中、工場見学に行くと労働組合の幹部が労働条件を説明してくれて、それを夢中でノートをしたと書かれていました。また、そのような所で見た労働者の様子が少し日本と違っている。悠々と腰を下ろしておしゃべりしていて、日本の工場の現場のような緊張感がない、不思議だなと思ったと書いてあります [p. 238-239]。やはりかなり違いましたか、日本の働く状況とは。

A：違います。

Q：それをどのように思われましたか。いいなというか……。

A：これは、理解しがたい、不思議だという感じです。説明を聞いて、質問もしました。日本で耳にするノルマは相当厳しく、達成すれば報奨金が出たりしますが、ノルマ自体は結構厳しいものだと理解していたんです。ところがそういう現場を見て疑問に思い、ノルマがどのように決められるのだと質問をしました。その労働組合の幹部が言うには、経営者側と労働組合との間で十分に煮詰めて、ノルマは当然達成できるはずのものを設定しているだけですと。だから、ノルマには厳しさは一切ありませんという答えでした。

Q：しかし、でも本当なのか、ですよ。

A：理解しがたいことですね。

Q：少しうがった見方をすれば、怠けていると。

A：行った所は、ソ連共産党の、日本で言うとかあつき印刷のような、何と言いましたっけ。

Q：プラウダの印刷所でしたね。

A：もっと緊張感があるはずですが、私の感覚からすると。それが、どっかり座っておしゃべりしているのだから、この連中は何を考えているのだろうと不思議な感じで、直接その案内役に質問してノルマはどうやって決まるのだと聞いたら、そのような型どおりの回答だけで、その回答は全然回答になっていませんでした。とにかく不思議だなという感覚です。

それからもう1つ非常に違和感を覚えたことがあります。案内してくれたのは、コムソモールの選ばれた幹部級の人でしょう。各国代表団の案内役を務める、責任ある立場の人ですから。その人が命令口調なのです、代表団に対して。そりゃあ、日本共産党も当時は相当な上意下達の組織形態、運動形態でし

たけれども、それでも特別それを感じ取りましたね。ソ連共産党とは一体なんだろうと思いました。

Q：ものすごく上意下達が強い、と。

A：そのようなものを感じました。だから、リーダーというものは命令口調なのです。「何しろ、こうしろ、なんで言うことを聞かない」というような感じの案内の仕方でした。日本でなら、外国からのお客さまを扱うときにあのような態度は取らないなと思ったことが1つ違和感でしたね。

それからもう1つ、非常によい体験をしました。オスタンキノの窓から見えた植物園で働いていた女の子を訪ねて行って、おうちまで行ったのです。おうちへ帰るときに、一緒に付いて行っていいかと言ったら、いいよと言うので、図々しく付いていきました。

Q：お宅の中まで入られたのですか。

A：アパートの一室へ案内されて、夕飯をごちそうになりました。

Q：それはよい経験ですね。

A：部屋へ入ったら粗末な部屋でした。日本の今のマンションとは比べものにならない粗末な建物で、部屋も小さな部屋で、台所と、居間と、みんな一部屋というくらいでした。

Q：そのご家族が何人だったか覚えていらっしゃいますか。

A：お父さんお母さんと、その娘と、3人家族でした。

Q：3人家族で一部屋ですか。

A：そうです。あるいは寝室は別でしょう、きっと。案内されたのはその居間兼、応接間というような感じの、食堂兼というような所だったのでしょ。そこへお兄さんの写真が飾ってありました。お兄さんはどのような方かと聞いたら、ニエメツキーと言いました。飛行機乗りで、ドイツとの戦闘で戦死したということで、ニエメツキーと言うときの言葉の強さはものすごく憎しみを込めた、日本に対するものとは全く違いました。肉親を亡くしているからなおのことでしょうが、そのような調子でお兄さんは戦闘機乗りで亡くなったと言っていました。最初、娘が私を連れて部屋入って行ったら、両親がぎくつとした顔をしていました。

Q：外国人は危ないのです。

A：僕はなんとか打ち解けようと思って、それこそ先ほどのあいさつ言葉だけ並べてしたら、お座りなさいということで、ちょうど夕飯時でした。それが、それこそ社会主義の素朴どころではないわけです。黒パンと牛乳だけです。

Q：本当に粗末な食事ですね。

A：これほど粗末な食生活をしているのかと少し驚きました。

Q：しかし、その黒パンと牛乳のみの食事をしている普通の人と、お客さん向けですが、バイキングでたくさんのお食事を食べている人と、ものすごく落差がありませんか。

A：そうです。それがびっくりしました、あれっ。一般の労働者の生活は決して豊かではないということを見てしまったという感じですね。平和友好祭の諸外国の代表団を歓迎するために相当無理して良いものを揃えているが、内実は決してそれほど豊かな生活ではないと思いました。お座りなさい、どうぞと言って黒パンを出してくれましたが、それは本当に自分たちが食べているものをそのまま出してくれたという感じで、お客さま相手に何か取り繕って出した感じは全然なくて、自然にちょうど食事時だから一緒に食べようよという感じで出してくれた食事が黒パンと牛乳だけでした。夕飯ですけどもね。だから、悪いことをしてしまったなという感じでした。

Q：しかし、それはよい体験をされています。

A：恐らく、代表団でもそこまで突っ込んで行った人はなかったと思います。

Q：長崎さんがお書きになった中にソ連は理想の国だった、理想郷と映ったなどとありますが [p. 238]、そうすると、外から見ているのと、中に少しでも入った時とは印象が違いますか。

A：今言ったような具体的な体験からすると、あれ、不思議だな、頭で理解していたことと現実とは結構差があるなとは感じました。

Q：ただ、あまり人に話されていないのではないですか、この話は。例えば帰った後に、ソ連でこんなことがあったと話すときに。

A：していないかもしれないですね。していないということは……。

Q：言っただけじゃない、悪いところを見てしまったという……。

A：日本の常識とすれば社会主義の祖国だし、華やかで、夢の国なので、そこへ行ってきた報告談は、やはり表側の良かったよと、素晴らしかったよという。

Q：日本の人が聞きたいと思うことを言わなければいけない、やはり。

A：そうですね。だから、労働条件の話はこういう言い方をしました。ノルマというものは決して労働者が達成困難な相当厳しいものではないようだ、相当民主的に経営者側と労働組合とが話をして決めるようだという話はしました。賃金の決め方でしたら、これも説明されたんですが、ソ連の内閣、首相などの賃金は、労働者の最高の賃金以上になってはならないという法律があって、労働者が一番大事にされている、賃金体系の上でもねと。政治権力を握ったらそれ以上の何かを得るということは全くないのだと説明されたので、そのとおりに言ったわけです。

Q：そのとおりに言ったのだが……というところですね。なかなか難しいですね。

A：難しいです。だから、このアパートまで行って夕飯をごちそうになったという話はしていないかもしれないですね。

Q：それは多分、どこか無意識のうちに、言ってはいけないことなのかもと、その当時思ったのでしょうかね。

A：それから、その工場ではおしゃべりばかりしていて、労働意欲が感じられないというような話もあまりしていない。要するに、ノルマというものが、悪く言えば、非常に厳しい奴隷的な労働だという考え方は全然違うのですと。

Q：ひとまず表向きのことを言って済ましていたというわけですね。それは面白い話です。

A：今になってみれば、ソ連共産党の支配下の社会がどんなものだったかだんだん解明されてきています。でも今、不破〔哲三〕さんなどがしきりに書いていることは、論理的には、あるいは当時の歴史のデータに基づいて分析して書いているわけで、不破さんは実態を知らないわけです。あのときのひどい話は、例えば弾圧されて、シベリア送りになって、あるいは銃殺刑になった例がたくさんあったというようなことは、データの上で読み取って、ソ連共産党と

は、スターリン主義とは一体なんぞやという話になっているけれども、一般の庶民の生活の実態としてどうだったというようなことは、ほとんど解明されていない。今になって私も思い出してみても、そこへ行く兆しはあったなと感じるわけです。先生なら研究をなさってそうした歴史を、もう少し詳しく実態をご存じですよ。

Q：ある程度は。

A：というような研究は非常に貴重だと思います。日本人一般というよりも、日本の革命政党の中で、まだソ連の実態はよく分かっていません。要するに今の不破さんなど、論理的に解説しているものがある程度分かってきただけ。

Q：しかし、それはやはり上のところですからね。もう少し入っていかなければ、下へ下へと。

A：そうです。だから、僕などが解明できればうれしいなと思うことは、ロシアの民衆の感覚です。これがロシア民謡以来、非常に親しみの持てるよい人たちなのですね。日本人と非常に共通した感覚を持っているのではないかと。西欧の連中とは少し違う感覚で、よい連中だなと思うところがあるのですが、これがスターリンのあの時代からずっと伝統的にロシア民謡の世界が生きてるとすれば、ロシアの民衆と政治情勢とはある程度違った世界が、違ったまま生きていたのかなと思うのです。

Q：話をまた戻していきたいと思います。今はどんな行事に出られたかという話でしたが、観光などは覚えていらっしゃるでしょうか。いわゆる物見遊山的なことです。レニングラードでは革命史跡のスモーリヌィに行ったと書いてありましたが [p. 241-242]、モスクワ観光の記述が本にはありませんでした。それこそレーニン廟には行かれましたか。

A：行っていません。

Q：何か理由はあるのですか。

A：行くチャンスがなかったのでしょうか。

Q：あの頃なら、廟は数時間の行列もあり得ますけれども。

A：考えたら不思議ですね。当時の私の感覚とすれば、行きたかったと思います。

Q：行ってもおかしくないのに、記述はありませんでした。

A：行っていないですね。

Q：クレムリンはどうですか。

A：通りかかったくらいですね。

Q：中に入った記憶はないですか。

A：ないです。見ていません。観光的なことと言うと、ポリショイ劇場だけです。

Q：あれは割り当てで行ったのですね。何を見られたか覚えていらっしゃいますか。バレエか、オペラか。

A：バレエですね。いわゆる天井桟敷で見ました、一番高い所で。

Q：多分、日本人何人かと一緒になって行くものですね。

A：日本人も何人かいただろうけれども、私は腹の具合が悪くてトイレに駆け込んで、みんなと別れてしまって、それでも天井桟敷なので、グラスを借りて見ようかと思って、大枚を出してグラスを借りたわけです。周りにいるのがみんな若い人ばかりで、「貸してよ、貸してよ」ということで。

Q：それを取られてしまって。

A：本当に天井桟敷で上から見下ろして、綺麗だなと思って帰ってきました。

Q：それぐらいですか、モスクワの観光というと。印象にないようですね。

A：あとはオスタンキノの植物園を見て回りました。

Q：植物園へ行って、種をもらってきたというお話ですね〔p. 240-241〕。

A：あとはないですね。

Q：町を歩いたとか、散歩したとか、そうしたこともあまり記憶にありませんか。

A：ないですね。

Q：となると、毎朝プログラムを見て、そこに行き、帰ってくるという感じで過ごされたのですか。

A：唯一先ほど言った、バスに乗り遅れて1人で一般のバスで帰ってきたというだけです。

Q：ある意味、模範的ですね。

A：そうですね。あまり観光という意識はありませんでした。

Q：これは公式行事ですが、8月3日に「日本の夕べ」という、日本の芸術代表が参加したコンサートのようなのがあったのですが、それに行かれた記憶はどうですか。

A：行っていないかもしれないですね。

Q：では、8月6日の原爆反対のマネージナヤ広場での大集会はどうですか。クレムリンの隣で「原爆許すまじ」を大合唱したのですが。

A：これも記憶にありません。

Q：別の所に行っていたのでしょうか。

A：どこに行っていたかも記憶にないけれども、総じて言えば、よその国の代表団との交歓会を主として歩いたこと、植物園との交流で家庭訪問までしたこと、あとはボリショイ劇場だけで、それ以外は今お話しになったようなことの記憶は全くありません。だから、割と単独行動だったのでしょうか。

Q：1人で動いているのですね。人によっては団体でみんな一緒に動いていたわけですが。

A：割と自分なりの選択で動いていたということですね。

Q：分かりました。あと当時の週刊誌の報道を確認させて下さい¹⁾。まずお金はどのくらい持っていらっしやいましたか、自分の自由になるお金。公式のプログラムに乗っているとお金は要らないと思います。朝ご飯は出ますし、送迎のバスも出て、やって、帰ってくるのにお金は使わないと思いますが、実際にお金はどれくらい持っていられましたか。

A：恐らくほとんどなかったかと思いますね。お土産の類いは全部、交歓会でもらったもので、個人的に買い物をした記憶は全くありません。

Q：買い物の記憶はないのですか。

A：ないです。

Q：回りのことも含めての確認ですが、若者なのでお金を持っていないだろうという配慮から、市内に何か所か物を換金できる場所を作っていて、そこでかなり優遇レートで、例えば持ってきたボールペンで何ドルだとか、カメラを売る人とか、あとは、変な話、女性の下着のブラジャーを売ったとか、そのよう

な話があるのですが、その記憶はないですか。

A：全くないですね。

Q：分かりました。あと、交歓会ではお土産をもらったそうですが、逆に渡す物は何かあったのですか。

A：絵葉書くらいです。

Q：特に何か日本から持っていったものはありますか。

A：特にそこまでの準備はできませんでしたね。

Q：やはり無理ですか。

A：絵葉書の類いぐらいです。それから、原水爆禁止のバッチなどですね。民青のバッチや代表団のバッチくらいしかお土産と言ってもなかったですね。

Q：これも周りでの話ですが、いろいろな所で集会があると、日本の代表は珍しいので議長になってくれと頼まれる、人によって議長になりたいと何人も言い争いをして、見苦しい風景があったそうです。議長になって挨拶をすると、延々と20～30分と続けて、聞く人が退屈していたと週刊誌の記事に書かれていました。そのような記憶はないですか。

A：全くないですね。

Q：やはり個人で動かれているからですね。

A：そうですね。恐らく私が歩いた各国代表団との交歓会は、日本人が少なく、日本代表団というような感じではありませんでした。だから、割と直接の交流で、今のような代表団の挨拶を誰がやったかなど全然意識に残っていないですね。

Q：それはよい過ごし方をされていると思います。記録を読む限り、多くはあちらに行っても日本人同士でつるんでいたようです。

A：それはあり得るでしょうね。というのは、本当の寄せ集め、要するに民青のような一応の政治信条を持った人たちもいれば、労働組合もいる、日青協や観光目的の人もいるという雑多な代表団で、代表団としての打ち合わせの準備までできていないのです。だから、本当に寄せ集めが行って、乗っかってしまったのでしょう。だから、帰ってきたらそれっきりです。代表団解散でしょ、帰ってくれば。その後の運動に何かメリットがあったかと言えばほとんどな

かったと言ってよいでしょうね。

Q：今、帰ってきた後は何もないということでしたが、実は芸術関係の代表団には同窓会があって、今でも続いています。パジャルスタ会と言います。芸術代表は中でまとまっていて、非常に楽しい思い出だったと言います。そのようなところもあるのですが、労働組合とかはなさそうですね、そのようなことは。

A：あるいは、私もあまり突っ込んで考えませんでした。与平がある程度役割を果たしていたかもしれませんね。

Q：土方さんは帰りは別行動だったと聞いています。だとすると、土方さんのまとまりの下に何かをやるとはならないと思います。

A：今のお話は、全く自主的な動き、独自の動きですね。

Q：芸術団の人から聞いた話ですが、8月11日の閉会式の日には日本代表が全員集まって、閉会式を欠席して会議をしていたそうです。その会議の場で、招待を受けたモンゴルに行くかどうかの話し合いを延々朝までしていたと言うのですが、これは記憶にないですか。

A：ないです。

Q：そのときも多分別行動ですね。

A：はい。

Q：芸術代表の人は、その時の恨みを今でも持っています、モンゴルに行きたかったのに。芸術関係の人は、自分たちが舞台上でやればそれでお金も入るし、招待を受けたのだから行ってみたいと。そうしたら労働代表が、芸術団はそれでよいけれども、俺たちはお金をどうするのだとか、団体行動を乱すのかといろいろ言われて、結局モンゴルに行かしてくれなかったと、そのようなことを言っています。

A：それは全く知りません。日本代表団の中でもあまり、付き合った、一緒に行動を共にしたという記憶がありません。

Q：その芸術代表の方から聞いた話ですが、帰りのシベリア鉄道の中で「シベリア亭」という寄席を開いていた。退屈なので、芸達者な人が集まっていますから、漫才をしたり、1人で踊っているのに何人かが踊っているように見える

ショーをやったりとか、そのような演芸の時間を帰りの電車の中でやっていたと言うのですが、聞かれたことはないですか。

A：これもないです。何をして過ごしたのでしょうか。

Q：帰りも沿線で歓迎会があったと聞いているので、行きと同じ要領でやっていたのでしょうかね。

これで結構長い時間しゃべって、一通り時系列で順番に聞きました。少し全体にわたることで確認したいのですが、政治の話で言うと、この前年がハンガリー動乱です。それから、ソ連の中でのスターリン批判も同じく前年ですが、そのような社会主義の威信を揺るがすような出来事は、当時はどう思われていましたか。何か影響はありましたか。

A：これは全く感じませんでした。

Q：やはり感じていないのですか。

A：情報としても、ハンガリー動乱の方は知っていました。

Q：ニュースになりました。

A：知っていて、是非の論争があったのですが、批判的な見解を持った人はごく少数でした、当時は。まだソ連の方を信じていた時代でしたから、日本の民主陣営では大きな話題になりませんでした。むしろ表向きに話をしたくない空気の方が強かったです。一定の批判的な見解を持った人はいましたが、それは少数派という状況でしたね。

Q：スターリン批判はどうですか。あれは56年の2月の末ですが、アメリカから漏れたのは6月でした。夏に新聞記事という形で出ています²⁾。印象にないですか。

A：まだ表向きの話になっていないと思います。

モスクワ平和友好祭は、私の印象としては、最後の花火が上がったというものです。これが最後で、もう後はがたがたと来た、ソ連自体ががたがたと行って、それから日本国内のソ連評価もこれ以後急速にいろいろと批判的な検討が加えられていきます。日本共産党の中で言えば、ミヤケンさん〔宮本顕治〕、それから不破さんの研究が非常に深いだけけれども、これももう少し後の話かと思えます。

しかし、この時代にはまだそのような兆しは全く見えていません。私の頭に残っているのは、先ほど言ったような、私の頭にあったことと現実とは少しギャップがあるな、一体なんだろうという疑問を感じたくらいで、おっしやるようなスターリン批判だとか、ソ連共産党自体が崩壊するというようなことは全くその時代にはないです。

Q：あとは、この後ですけれども、平和運動の反核の話が、日本社会党と日本共産党がもめ出しますね。あともう1つ大きなものは中ソ対立。外国の共産党との関連。この辺が問題かなと思っているのですけれども。

A：原水爆禁止の運動では、共産党の中が志賀〔義雄〕ともう1人〔神山茂夫〕、2人が党から除名になっていますね。この事件が大きかったという印象はありますが、これは要するに、党内の具体的な評価の違いということと、それから、国際的にも日本の原水爆禁止運動がいわゆる国際派の進めようとしている路線と対立が表ざたになった時期があるわけです。特に社共の間でその見解が分かれてという時代がしばらくあって、運動時代が沈滞したのではなかったですかね、その後ね。

Q：帰られて数年の辺りからまたおかしくなるのですか。

A：そうですね。この平和友好祭の時期が最後の花という感じが私の頭の中には残っています。

Q：私もそれは思います。あと、文化代表の人が言っていることですが、行く前は政治的にはアカにかぶれるのではないかと、このようなかたちで心配して行ったのだけれども、行ってみるとなんの大したこともない、単なるお祭り騒ぎだったと、日本政府の心配は杞憂だったとおっしゃっていますが³⁾、印象としてはやはりそうですか。単なるお祭り騒ぎでしたか。

A：名前のおりの平和友好祭であって、ソ連側が何かの政治的な意図を持っている、プロパガンダという印象は全くありませんでした。だから、日本代表団はいろいろな寄せ集めで行ったわけですが、その人たちが何か工作を受けたとか、働きかけを受けたということは全くなかったでしょうね。

Q：先ほどあまり知り合いはいないということでしたが、このときが縁で知り合いになって、その後続いた方はいらっしゃいますか、長崎さんは。

A：代表団の中ですか。

Q：代表団の中で、ひと月ほど一緒に行動して、それで続いた縁です。

A：2～3年手紙のやり取りはしたのは、同室だった2人ですが、これもそれっきりですね。

Q：数年ですね。それ以外の日本人の人とは縁がないのですね。

A：あまり縁がないですね。

Q：逆にあちらで会った外国の人はどうですか。モスクワで会った外国人の人は、その後何か文通など。

A：何もないです。

Q：住所の交換をすることはありましたか。

A：そこまではありませんね。

Q：ずっとしゃべってきましたが、この平和友好祭はどのような位置づけになるのですか、長崎さんからすると。人生の中には、これがなかったら変わってしまう大事なものもあれば、こんなこともあったよねという軽いものなど色々ありますが、位置づけで言うと、重い方、軽い方、どちらになりますか。今言った話で言うと、これがなかったら人生が変わってしまうというような、そのような思いとはあまり受け取れないのですが、聞いている限りは。

A：うん、そうですね。重いか軽いかと言えば、まあ軽い方でしょうね。

Q：こういうこともあったなという感じですか。

A：思い出話の1つというくらいで、私の人生観に何を与えたかという、それほどの評価はないですね。

先生がこの友好祭を取り上げられたのは、いわば日露関係の通史としてですか。

Q：私はロシア語専攻向けの学生にも教えていますが、そのときにソ連時代をどのように教えるのか悩んできました。今の学生とはなかなか接点が見つけないのですが、日本とソ連との関係、もしくは、私が今やっているような、日本人がソ連をどう見ていたのかという形にすると、いろいろな話題が盛り込めるのです。日本人がソ連をどのように思ったのか、普通、一般に言われるのは、シベリア抑留など、ソ連に対するマイナス・イメージの恨みつらみで語り

ますが、日本人が見たソ連の中には色々なものがある。平和友好祭も、そういったものの1つと言えます。今まで誰も注目してこなかったのは、日本とソ連、ロシアとの関係が悪いからで、あえてこのような問題は見ないようにしてきた。でも、このようなこともあったのだから、可能性としては、ここから日本とソ連との間がもう少し友好的な方に行く可能性もあった。そういう実現しなかった可能性として友好につながるものを探すと幾つかあるのです。それをきちんと拾って形にしないと、過去のことを、昔の悪いことばかりで語る悪循環に陥っていくので、良いものも悪いものも含めての日露関係、日ソ関係をやってみたいと思っています。

A：もしご興味をお持ちでしたら話題にしたいと思うのは、ロシア民謡、これがいまでもうたごえ喫茶で受け継がれていて、日本人に非常に親しまれています。ソ連との歴史的関係、政治的な関係は抜きにして、ロシア民謡を懐かしがる世代がいて、私の年代ですが、それが今は復活して非常に盛んなのです。これを翻訳して日本に普及した人が森おくじさんという、カチューシャ楽団の専属だった人です。3年ほど前に〔2008年に〕亡くなりましたが、その森おくじさんが残したものが出版されています⁴⁾。奥さんが私と親しい人で、カチューシャ楽団の出身です。このロシア民謡も日ソ関係の切り口の1つとして面白いかなと思います。

Q：そうですね。私の知り合いでうたごえの話をやっている者がいるので、去年一緒に新宿の「ともしび」に行ってきました。

A：恐らくカチューシャ楽団の森おくじという名前は、そうした人たちには知られている名前だと思います。

Q：そういうことは探してみればあるのです。ただ、大きくは形になっていないので、みんなすぐには印象が出てこないわけです。そのようなものを拾ってみたいなと思っています。

A：森おくじさんのカチューシャ楽団などは、それこそ抑留されて悲惨な生活を送ってきた人が、引揚げ後ロシア民謡の普及に努めて、それで一生を送ったような話であるわけで、いろいろですね。

Q：どのような関心を持って過去を見るかなのです。しかし、誰もやっていな

いことをやるのは大変で、断片的なものが山のようにあるのを集めるところから始まるので、なかなか形にならないのですけれどもね。

これは情報ですが、平和友好祭の話を聞いた中に少し変わった経歴の人がいらっしゃいました。東宝争議のときに民青に入った方で、その後、北京に行って北京機関のアナウンサー、さらにはモスクワ放送に移ってアナウンサーをされています。日ソ国交回復前の1954年に北京からモスクワに行っているのです。57年の平和友好祭はあちらに住んでいて日本人を出迎えたという人です。このモスクワ放送の職員だった人にも話を聞いてきました。まだご健在で、92歳だったでしょうか。

A：これはもう歴史の証人として非常に面白いですね。

Q：だから、この中で東宝争議のことが少し出てきたので、どこかで擦れ違っているのかなと思ひながら私は読みました。

A：土方与平が生きていれば、また面白い話があると思うのですけれども。

Q：幾つかつながりますね。

A：これも死んでしまいましたので。青年劇場を取材したら、あるいはまた。

Q：こういうものは中心になる人物にたどり着かないと全体像が見えません。

A：あと、世界民青連に常駐していた人で、これはまだ生きているでしょうか、西沢舜一。

Q：西沢隆二〔筆名ぬやま・ひろし〕ではありませんね。

A：ではありません。しゅんちゃん、しゅんちゃんと呼んでいました。これもやはり青年共産同盟以来の、私にとっては同志で、30になるかならないかのときにやはり民青連に派遣されて、50年代の後、要するに宮本〔顕治〕さんの時代になって、党の青年部長を務めたり、後に文化部長をやったりした、民青出身では一番の出世組かもしれません。この人が、世界民青連と民青との関わりの方は一番よく知っていると思います。

Q：まだご健在ですか。

A：しばらく文通していないから、あるいはもう亡くなってしまったかもしれませんね。

Q：仕方がないです、もう60年近く前の話なので。

A：しゅんちゃんは生きていますよね。〔2008年12月10日死去〕

Q：何かあればまたご連絡ください。

A：もしお役に立つようなものがあれば、なんなりと活用していただければと思っています。

Q：今思い出しましたけれども、行かれた当時は岡田嘉子がいるわけですね、モスクワに。印象はないですか。

A：岡田嘉子がいたのですか。

Q：モスクワ在住です。日本代表団を訪ねて来て、世話をしたと聞いています。印象はないですか。

A：あまり記憶にありません。

Q：芸術関係の方に行っていたということでしょう。

A：そうですね。

Q：岡田嘉子も交えて、日本代表全員で写真を撮ったという話も聞きました、ホテルの前で。「誰かの所にはあるから」とか、「そのうち見せてあげるよ」と言われているのですが、そこに長崎さんは写っているのでしょうかね。

A：さてどうでしょう。

Q：どこか行っていたかもしれませんね、今の話では。

A：代表団を務めた連中の中で話を聞かれたのは、今の芸術関係の人たちのほかには、今のところ民青の関係では……。

Q：つてが全然見つからないのです。

A：言わば私が唯一。

Q：そうです。だから、珍しいなと思って声を掛けました。

A：私も、当時これに関わった連中でご紹介できるような者は、もう生き残っていないですね。

Q：仕方がありません。150人とは言え、やはり60年たつとかなり亡くなっていらっしゃるのです。うたごえの方も確認は取ったのですが、『うたごえ新聞』に頼んで。うたごえ関係は6人ぐらい行っているのですが、今でもご健在で、話が聞けるとい方はお1人でした。あとは亡くなった方と、連絡先が不明な方でした。

A：その1人は誰ですか。

Q：柴田〔泰子〕さんという女性の方でした。ご存じですか。

A：知っています。

Q：うたごえでまだ活動されているとおっしゃっていました。

A：私より少し若いですね。

Q：そうです。82〜3とおっしゃっていました。一緒に行ったことは覚えていらっしゃいますか。

A：覚えています。日本ではそれほど接触はありませんでした。年代が私よりもだいぶ若いので、後輩としての認識でした。私の接触は同年輩の連中ですから、合唱団の一期生です。

Q：藤本〔洋〕さんとかですか。

A：ええ。

Q：まだご健在と聞きました。

A：そうですか。飯田光江だとか、そこら辺の連中です。これは残っているのではないのでしょうか。生きていますと思います。

Q：〔モスクワに行った〕日高三郎さんという、国労の人は。

A：ちょっと思い出せないですね。

Q：年代からいくと、長崎さんは割と団の中では年上の方ですね。

A：そうです。

Q：行かれたときは27か8ですね。

A：そうですね。

Q：割と上の方になりますね。

A：そうですね。

Q：仕方がないですね。また何か思い出したらということで、結構面白かったです。では、また何かありましたらということで。

A：どうぞお役に立てれば。

Q：大変面白い話だったので、なんらかのかたちで使わせていただきます。

(全編、了)

注

- 1) 「貧しき百五十人の旅行者：友好祭代表団始末記」『週刊新潮』1957年第38号、34～37ページ。
- 2) 米国務省が1956年6月4日に公表。日本の新聞各社も翌5日付で速報している。ここに至る経緯は、次を参照。塩川伸明「スターリン批判と日本——予備的覚書」<http://www7b.biglobe.ne.jp/~shiokawa/notes/Stalinhan-p.pdf>〔2017年11月5日最終閲覧〕
- 3) 一例として、「平和友好祭に臨んで」『邦楽の友』1957年10月号、54ページ。
- 4) 森ふみ、齊藤亨（編）『ロシア民謡を日本に広めた森おくじの世界：楽譜集』（清風堂書店、2014年）